

あるが、実数は20人である。次に〔B〕では、23 g_{eme}とあるが、実数は17 g_{eme}である。これは、マイナス記号が消えていたに違いない。ごく一例をとってもこういう状態である。

筆者は、かゝる例証を、シュメール経済文書の手写史料による検討の非科学性の例としてとりあげているのではもちろんない。むしろ不可避的な史料の不正確さを、同種の文書を比較対照することによって、かなりの程度まで補正で

きることを主張したいのである。きくところによれば、ヨーロッパ中世の修道院などの経済文書にも、こうした不正確さが付随するというが、ラガシュ文書には、多数の \check{se} -ba表のごとき比較検討のできる記録があるということを強調したい。

(註)

「シュメール都市国家ラガシュにおける神殿の社会組織について——割当地保有者をめぐって」(「史林」41巻6号)

バブ教とバハイ教

高林 藤 樹

バブ教およびバハイ教について、我が国ではあまりよく知られていない。それは、今日ではすでに100年に余る歴史を有し、教徒もほとんど全世界にわたって存在して居り、世界教の名を冠してはゞがらない程の勢力を擁している。日本への到来は割合早く、大正年間にはすでに各地で布教が試みられていたが、戦時中はその世界主義的な主張が誤解されて弾圧を受けた為、未だ教徒も少なく、一般にもあまり知られていない。発祥地がイランであることは、西南アジア研究会にとっても縁浅しとしないとことから、以下簡単ながら紹介を試みる次第であるが、もとより研究も充分でなく、不明の点も多い。読者諸氏の御教示を切にお願いする次第である。

(1) 名称について

両者共、教祖の名をとったものである。バブ Babとはアラビア語で「門」を意味し、イスラムにおいて、人々がそれを通して真理に到達することが出来るとされているもので、元来精神的な指導者を指すものであったが、バブ教が有名になってからは、教祖ミールザー・アリー・ムハンマドの別名として専ら用いられるようになった。

バハイ教は、教祖ミールザー・ホセイーン・アリー・ヌーリーの別名をバハー・ウッラーと言ったので、その名をとったものである。バハーはアラビア語で「栄光」の意である。ところで「イ」はベルシャ語で人々の集団を表す接尾辞であるから、バハーイーは「バハー教の人々」の意味である。従って邦訳も「バハー教」の方が適当かも知れないが、教徒の間では「バハイ

教」又は「バハイ信教」と言いならわしている
ので、今はそれに従っておく。序でに、バブ
教徒のことはバービーと言う。

(2) 沿革

バブ教およびバハイ教は実は一つの宗教運
動である。主流争いに端を発して、バハー・ウ
ッラーの率いる一派をバハーイーとしたのが、
バハイ教の始まりであるが、根本精神は一つで
ある。従って歴史的に観る時は一本にまとめて
取扱った方が便利である。

前述の如く、バブ教はミールザー・アリー
・ムハンマドによって創始された。彼は1819
年5月26日、イランの南部にあるシーラーズの
町に生れた。生家は予言者マホメットの後裔と
して認められているセイェドの家柄であった。
父は商業を営んでいたが、早く亡くなったので
叔父の家に引きとられて育てられた。17才の
頃、隊商に従いシーア派の聖地カルバラへ順礼
してこゝに留り、シェイキー派の神学を学んだ。
数年の後、帰国した彼は、やがて「バブ」に
到達したとの自覚を持つに至り、1844年、
彼が25才の時に、自分こそ久しくその出現を
待たれていたマフディーであると宣言した。

マフディーは、イスラム教シーア派の中の十
二イマーム派では第12代のイマームのことで、
彼は死んだのではなく、一時神隠しになったに
過ぎず、末世に再来して人類を救うとされてい
るものである。これは一種のメシヤ思想である
が、シーラーズ方面に勢力のあったシェイキー
派の人々の間では、特に熱心に信じられるよう
になっていた。

バブは最初ブーシールのモルラ・ホセイ
ンに彼の宣言を伝えたが、数日間検討を加えた後、
モルラ・ホセインはこの宣言を容れ、バブを
マフディーとして信じ、最初の帰依者となった。
これよりシーラーズのシェイキー派を中心に、
バブの教えは全国に向って急速に拡大して行
った。バブは最初の使徒18人を「生ける者
の文字」としてイランおよびトルキスタンの各
地に送って盛んな布教活動を行なった。彼の教
えは当時カジャール朝の王政に苦しんでいた民
衆に強く訴えるところがあり、たちまちにして
全土に知られるに至ったが、同時に迫害も一斉
に起った。

まず、マフディーの出現を待望していた人々
の中には、伝説通りの奇跡を期待していたにも
拘らず、その徴候が現れなかったので失望し、
却って迫害を始める者が出た。これとバブの
主張する社会的改革を好まない支配階級は、共
同して公然と迫害を行なった。シーラーズにコ
レラが流行した時、バブらはイスファハンの
地に移り、こゝで市長のマヌーチフル・ハーン
の保護を受けたが、彼の死後、人々はファール
スの知事ホセイン・ハーンを説いてバブを異
端者として弾圧させた。この後、官憲に依る弾
圧とイスラム各派からの迫害は烈しくなった。
そして、最初は純粹に宗教的であったこの運動
も、外部に対抗して結束を固めるようになり、
次第に党派意識が芽生え、やがて政治的な運動
に変質してきた。

特にバブが「ノグター・イ・オーラー」の
称号を用いるに至ってからは、他宗派からの憎

悪は爆発した。これは「最初の点」という意味で、イスラムの信徒から予言者マホメットに奉られた尊称で、イマームさえもこの称号の前には第二義的なものになるのである。従って、これを称したことは、バーブ自身をマホメットの地位に引き上げたことになり、イスラム教においてこれ以上の僭越はないことになるのであった。

一方、官憲の弾圧は止まず、至る所で信徒は捕えられ投獄された。バーブも亦遂に捕えられ、マクラーの獄に監禁された。1849年から50年にかけて、弾圧は頂点に達し、中でもシェイク・タバルシーとゼンジャンにおいては攻防戦が展開されたが、激しい抵抗にも拘らず、バーブ教徒軍は敗北した。1850年1月、セイェド・ヤフヤー・ダーラービーがナイリーズの城にたてこもると、皇帝ナースル・ウッディーンシャーも遂に全国的に弾圧令を下した。同年7月には、教祖バーブが、タブリーズの兵営において、銃殺刑に処せられた。この時、ザンワズの青年ミールザー・ムハンマド・アリーも殉教の死を遂げた。この頃までに全国において、四万の教徒が虐殺されたといわれている。

この間にあっても、ブーシールのモルラ・ホセインは熱心に布教に従事し、テヘランにおいてミールザー・ヤフヤー、ミールザー・ホセイーン・アリーの兄弟を改宗させた。彼等はマゼンデルアンのヌールの名門の出身で、父はベルシャ王室の大臣職にあり、名はセイェド・ミールザー・アッパースといった。六人の夫人があり、多くの子女を有したが、何れもバーブ教に帰依

した。ミールザー・ヤフヤーは第一夫人の子、ミールザー・ホセイーン・アリーは第二夫人の子である。又、この頃、詩人として有名なゴウラト・ウル・エイン女史も改宗した。

ミールザー・ヤフヤーとミールザー・ホセイーン・アリーはそれぞれソブヘ・アザル、バハー・ウッラーと称し、共に教団内で有力な存在であったが、バーブ亡き後は互いに争い、やがて教団は二派に分裂してしまった。ソブヘ・アザルの率いる派をアザリーと称し、バハー・ウッラーの率いる派をバハーイーと称したが、バハーイーは次第に優勢となり、アザリーは程なく衰えてしまったので、バハーイーがバハイ教としてバーブ教の後を継承し、今日に至った。

バハイ教の教祖バハー・ウッラーは、1817年11月12日にテヘランで生れた。父はすでに述べた通り大臣にまでなった人であったが、バハー・ウッラーは地位を捨て、バーブ教に身を投じた。1850年、彼が33才の時、弾圧はいよいよ激しくなったが、彼はマゼンデルアンのシェイク・タバルシーに出かけ、シーア派の学者と争って捕えられ、アムールの獄舎に投ぜられた。又、1852年にはバーブ教徒の一青年が、テヘラン市外のシミランにおいて皇帝の暗殺を企てた。この事件は失敗に終わったが、これをきっかけとして多くの教徒が捕えられた。バハー・ウッラーも亦捕囚の身となったが、程なくロシア公使の斡旋する所となり、彼は処刑を免れ、かわりにイラクのバグダードへ追放された。しばらくしてミールザー・ヤフヤーも追

害を避けてバグダードへやって来た。

バハー・ウッラーは、イランに在った頃から人々の信望を得ていたが、バグダードに移されたからも熱心に布教に従事したので名声は益々たかまり、この教えは各地にひろまった。ミールザー・ヤフヤーとその派の人々は、バハー・ウッラーの成功をねたむあまり、種々の策動をしたので、一年も経つ頃には、バハー・ウッラーも遂に身を引かざるを得ない程になった。そこで彼は突然、誰にも告げず、唯一人の従僕を連れてクルディスタンのスレイマニヤに赴いた。数日後、この従僕は賊に襲われて殺されたので、それから後、バハー・ウッラーは単身この荒野に在った。彼のバハイ教についての大綱は、この時に出来上ったと伝えられる。

バハー・ウッラーがスレイマニヤの荒野に2年間滞在している間に、教徒達の間には不和が生じ、熱意も次第に冷めてしまったので、バハー・ウッラーの弟のアガー・ミールザー・ムーサーをはじめ、主だった人々は教団に和合を取りもどすために、バハー・ウッラーを迎えようとして、所在の調査のために起ち上った。彼らは手を尽して旅人などから聞き込みを行なった結果、クルディスタンのスレイマニヤの山中にいる事が判明した。そこで、アガー・ミールザー・ムーサーの甥のシェイク・スルターンが使者となり、多くの手紙を携えて迎えに行った。バハー・ウッラーは帰還後更に布教に努めたので以前にも増して名声は揚り、この教えに帰依する者は急増した。彼はその間にも盛に筆を執り、各方面に書簡を送り、為政者に警告を発し

たりした。

この頃、イラク駐在のイギリス総領事サー・アーノルド・バロウズ、ケンバル大佐は、バハー・ウッラーの名声の高いのに注目して、彼をイギリスの保護下に置こうと計画した。しかし、再三の誘いかけにも拘らず、バハー・ウッラーはイギリス政府の保護を喜ばず、遂にその申し出を拒否してしまった。

バハー・ウッラーの勢力が増すにつれて、周囲の嫉妬も増し、カルバラやナジャーフのシーア派学者連中の間には、次第に憎悪が芽生えて来た。中でもナースル・ウッディーン・シャーの命を受けて聖廟の改修に来ていたテヘランのシェイク・アブドゥル・ホセインは、これらの学者連中と結託してバハー・ウッラー排斥の運動を起そうとした。しかし、この排斥運動は成功しなかった。シェイク・アブドゥル・ホセイン等は、一方ではナースル・ウッディーン・シャーに書簡を送ってバグダードにおけるバブ教徒の恐るべき影響について陳べ、他方では同時にコンスタンチノーブル駐在のペルシャ大使ミールザー・ホセイン・カーンを促して、トルコ皇帝アブドゥル・アジズに働きかけて、バハー・ウッラーをバグダードから他の地に移すように運動した。かくて、バハー・ウッラーはトルコ政府の命令により、バグダードからコンスタンチノーブルに移されることになった。これは、1863年のことで、バハー・ウッラーはバグダードに11年余り滞在したことになる。彼は4月20日、バグダードを出発し、一先ず郊外にあったリズワンの庭園に移った。これはナジブ

・パシャの別荘であったが、バハー・ウッラーはこゝで別れを惜しむ信徒の為に12日間逗留した。そしてこの逗留の間にバハー・ウッラーは彼が予言者であるということについて宣言を發した。彼はそこからフライジャートに移り、ケルクーク、モスル、ディヤール・バクルを経てコンスタンチノーブルに向った。

一方、ミールザー・ヤフヤーは秘かにバグダードを出て先廻りし、モスルから偽名を用いて一行に紛れこみ、コンスタンチノーブルまで同行した。

コンスタンチノーブル到着後、四ヶ月経て、一行は更にアドリアノーブルに移された。こゝでミールザー・ヤフヤー(ソブヘ・アザル)は再び別行動をとり、バハーイーに対して激しく反抗し始めた。その手口も悪辣で、バハー・ウッラーは何度も暗殺されかけたと伝えられている。又、イスファハンのセイェド・ムハンマドは、公然とソブヘ・アザルの側につき、共同して反抗するようになった。こうして、アザリーとバハーイーの反目は日増しに募り、分裂は決定的となった。バハーイーがバハー・ウッラーの名声により次第に勢力を拡張したのに対して、アザリーは対抗のため、却ってシーア派に接近したので、バーク教の主流はバハーイーの掌握するところとなった。

この間にも、ペルシャ大使ミールザー・ホセイーン・カーンはトルコ政府と交渉し、バーク教を亡す為に腐心していたが、遂に宰相アリー・パシャ、外相ファード・パシャを動かしてバハー・ウッラーを流刑地アッカに移すことに成功

した。又、ソブヘ・アザルは、キプロスに追放されることになった。これは1868年のことで、バハー・ウッラーはアドリアノーブルに約5年滞在した。

アッカへの追放の目的は、バハーイーの壊滅にあったので、トルコ政府はバハー・ウッラーの随伴者を四人に制限した。しかし、教徒の多くはアッカへの同行を願ひ、アドリアノーブルを出てガリポリに到着した時、彼らの不満は爆發した。護衛隊長のウマル・エフェンディは処置に困り、政府も遂に譲歩して、全員の随行を許した。

アッカでは、一行は最初兵營に収容されたが、待遇が悪く、病人が続出したりした。又、抑留生活が長びくにつれて、脱落者も出るようになった。バハー・ウッラーは絶えず教徒を鼓舞し続けていたが、イスファハンのセイェド・ムハンマドが現れ、又もや妨害に乗り出して来た。セイェド・ムハンマドの妨害が段々ひどくなってくると、これに対抗してバハーイーの中にも彼を暗殺しようとする運動が生れた。そしてバハー・ウッラーの反対にも拘らず実行され、下手人であったバハーイーは逮捕された。

アッカでの晩年は、束縛も次第にゆるみ、兵營を出て市内に居住を許され、更にバハー・ウッラーは各地の教徒の寄附により、比較的安楽な生活を営むことが出来た。そうして1892年5月28日、76才で他界した。

バハー・ウッラーの死後、教団の内部では分裂が起った。これは、バハー・ウッラーの子らの中に主導権争いが起ったものであるが、第一

夫人の長子アッバース・エフェンディ(実は第二子、第一子は夭折)が後継者として自ら任じたのに対して、これを喜ばぬ人々は第二夫人の長子ムハンマド・アリー・エフェンディをたてゝ争った。

この後、反目が続き、又、暗闘がくり返されたが、両派共布教に力を入れたので、ヨーロッパ及び北米に信者の数が急増した。中でもレバノンのイブラーヒム・ジョージ・ハイルツラーは、アメリカにおいて盛んな布教活動を展開しアッバース・エフェンディと対抗した。しかし今日ではアッバース・エフェンディの派が正統派としての地位を確保し、彼は「神の栄光の具現者」として崇められることになった。

彼の後は孫のショーギ・エフェンディが第1代守護者として教団の統率者の地位につき、統合の中心となった。但し、ショーギ・エフェンディは万世一系の世襲教長の第1代に定められていたにも拘らず、遺訓も残さず、嗣子もないままに1957年末急逝した。今日、教団は、「大業の翼成者」と呼ばれる側近者達の集団指導に依り統率されている。

(3) 教義について

バーブの教えはイスラム教に負う所が多いが新しい思想も取り入れている。その根本とするところは、神は唯一で、彼はその栄光を顕示する鏡であるという点である。又、靈魂は不滅であり、人は死後の生を持つと説く。即ち、死は第二の誕生であり、人は生前において死後の生をより完全にする為の準備として善行を積まなければならぬとする。又、復活・審判の日・

楽園及び地獄等についても、それらに関する諸々の教えの真髓について説明し、物質的の天国や地獄、又、肉体の復活などの観念は、単に想像の作りごとであるとしている。

次に社会倫理的には、神の愛は万人に平等であるとのたて前から、博愛・平等・奉仕の精神を説き、産業の振興・教育の普及、女権の拡張・社会福祉の実施等がモットーとして掲げられた。バハー・ウツラーはバハイ秩序による人類の統合を強く叫び、具体的な計画を発表して諸国元首に呼びかけた。その中で特色の顕著なものは、国際裁判所の設立、世界共通の国際補助語の採用、(バハイ教においてザメンホフに対する評価は極めて高い)、所得累進税の実施、公共機関による社会福祉の実施、軍備の完全撤廃等々である。

これらは今日の常識では、特に目新しいものではないが、百年前のイランにおいては、随分思い切った着想であった。従って、当時圧政下苦しんでいたアジアの民衆に訴えるところも強く、驚くべき速さで拡って行ったのも当然であった。

次に変わったものとして独特の暦法を挙げる事が出来る。それは19日を1月とし、19月を1年とする太陽暦で、都合361日に4～5日の閏日を加えたものである。年首は春分に定めてあるが、これはイラン暦にならったものである。又、神聖数としてバーブは19を、バハー・ウツラーは9を指定した。これはいうまでもなくアブジャド(主としてセム系民族に行なわれる習慣で、アルファベットの各字母にそ

れぞれ固有の数値を与え、それにより単語などの数値を決めるもの)によるもので、19はワーヒド(唯一)及びウジュド(実在)、9はバハー(栄光)の語がこれに当る。

その他、イスラムの習慣を踏襲した好適例としてはルーゼー(断食)がある。これは第19月に行なわれ、その実施要領はイスラムのそれと同様であるが、こちらは太陽暦に依っているので、毎年の時期が一定するなど合理的である。

* * *

以上、簡単な紹介であったが、我々はここでバハイ教が天理教とほゞ同じくらいの歴史を有しながら、天理教が日本の宗教以上に伸び得ないにも拘らず、バハイ教は早くも世界教の名を

冠してもはゞからない程大きくなった点に注目しなければならない。この二者の違いは、やはり必然的に生じたものである。それは、教義の本質にも問題はあるが、何と云ってもその置かれた歴史的な環境が、それぞれの方向を決定づけた根本要因であると考えられる。すなわち、19世紀のイランは、時も場所も新宗教発生に好都合であったと言える。たゞ残念ながらこの方面の研究は未だ充分になされていないので、詳しいことは将来にまたなければならない。バハイ教を他の大宗教に比肩するのは早いかも知れないが、世界の大宗教がその発祥地を、いずれも西南アジアの地にしているのは、まことに興味あることである。

Yahya ben Ādam's Kitāb al-Kharāj. edited,
translated and provided with an introduction
and notes by A. ben Shemesh. Leiden E. J. Brill

1958. X + 172 pp.

佐 藤 圭 四 郎

本書はライデンのブリル書店から続刊される予定の「イスラームにおける徴税」(Taxation in Islam)という叢書の第一巻として公刊されたもので、現存するイスラーム世界の徴税に関する纏った著述としては最も古いヤフヤー・ベン・アーダムの「キターブ・アル・ハラージ」(租税の書)をテル・アヴィヴ大学 Tel Aviv Univ. のイスラーム法の

教授ベン・シェメシュ博士が註釈を附して英訳したものである。本書のアラビア語の原本は、もとシャルル・シュフェ Charles Schefer 博士の蔵書で、いまバリの国民図書館にある写本であって、まず1896年にシャインボウル Th. W. Juynboll が公刊し、ついで1928年に法官シャーキル Ahmad Muḥammad Shākīr Abu al-Ashbāl が前